

## 魚群を対照とする浸漬ワクチン処理法に関する研究—Ⅱ

青木 宙・北尾忠利・河野勝彦      高橋 誓      江草周三  
(宮崎大学)                              (滋賀県水産試験場)      (東京大学)

日本細菌学雑誌 33(1) (1978)

1. 平均魚体重 5.1 g 以上のアユは 5.3 2% の食塩水中で 2 分間浸漬してもほとんど斃死は認められなかった。
2. 食塩水の濃度が 5% の時に Cl の血中濃度が最も高く、次いで 2.5%、0% の順であった。高張圧溶液の浸漬によっても鰓が刺激され、その量も体側に比較して 9 倍程度吸収が高かった。
3. ホルマリン死菌培養液の遠心上清液はアユに対して毒性があり、浸漬後 3 日間の間には多数の斃死が認められ、防禦効果はなかった。遠心沈澱菌体はアユに対して毒性がなく、しかも防禦効果が認められた。
4. 凍結乾燥死菌を用いた浸漬処理については処理後 10 日目から防禦効果が認められ、2 ヶ月後もその効果は持続した。
5. ホルマリン死菌またはアジュバント死菌接種魚は、防禦効果および抗体価の上昇が認められた。一方、食塩水のみおよびワクチン浸漬処理魚では血清中の抗体価の上昇は認められなかった。